

読売歌壇

小池 光選

若くしてしてみなければ無駄だったバスに乗るなり席譲られて

【評】思わず笑ってしまった。短歌で笑うこともとても大事。精一杯若くして乗り込んだバスであるが、あつけない席を譲られてがっかりした。「無駄だった」が生きている。返本はその都度そっとモーパッサンの『女の一生』を父の書棚へ

高槻市 佐々木文子

【評】思春期のころの思い出。そのタイトルに引かれてこわくお読んでみた。感性すごい文学少女だったのだろう。また十代の少女がこっそりモーパッサンを読む。えらい。

もう一度金色堂を見たいと願望のあり卒寿の夫に

我孫子市 増田千代子

【評】奥州平泉、中尊寺の金色堂だろう。むかし見て感動深かった。卒寿のいま、もう一度見たい。願望かなえられずうらやま。

めらめらしたがる怒りの我がこころ熱き鱈鮓をすすり鎮める

秩父市 高橋 秀文

両親と手をつなぎ行く幼子、幸せだったと気づくのはいつ

仙台市 小野寺寿子

わが眼少しく斜視であることに初めて気づく七十五にて

藤枝市 北泊あけみ
「白桃」思ふ 栃木市 近藤 靖子
投稿は毎週なれど入選の一年なきを夫は励ます
公園の落ち葉や鳩を眺めては啄木さんの歌集を開く
美味そうに食べる娘の初めての発した言葉は「はぎご、はぎご」と 東村山市 伊藤美津子

栗木 京子選

コロナ明け血圧計置く待合室思ひ思ひに腕を差し込む

【評】コロナ禍では、接触をさけるため待合室に血圧計を置いていなかったのだろう。状況が落ち着いて血圧計が復活した。下句はゲームに参加するようで、どこか楽しそう。

水馬に通せんぼされはしゃぐ子ら川面に夏の光も跳ねる

鎌倉市 荒井美知子

【評】水馬を蹴散らして川を渡るのではなく、はしゃぎながら水馬を見つめている子たち。やさしそうな姿が「通せんぼ」から伝わる。

明るい声や跳ねる光に胸が躍る一首。

廃校のプールサイドにのこされた一足半のビーチサンダル

川越市 石田浩二郎

【評】水の入っていないプール。一足半ということは、対のサンダルの他に片方だけのサンダルもある。寂しい光景が目につく。

いのちあるものみな愛し木の枝を走る栗鼠にも涙がにじむ

群馬県 真庭 義夫

勤め帰りに地元の小さな図書館に立ち寄る「追悼平岩弓枝」のコーナー

東京都 青山 繁

三度読み気づかなかった誤変換アドレスには語尾から読めと 倉敷市 中路 修平
でも俺の孤独は誰の孤独より孤独だということすれちがう 京都市 布野 割歩
花咲かせ小鳥に餌をやる人が雨戸の音に苦情言ひたり 国分寺市 加藤 武夫
降り出せる雨に駆け出す足もなく老いはゆるくなり頭上のハンカチ 横濱市 芳垣 光勇
イカ釣りの人の並べる波止場にも夏の彩りハマナスの咲く 瑞穂市 渡部 芳郎

俵 万智選

「飲むか？」ってあなたのくれるひと口がビールのかなでいちばん好きだ

【評】ふっと気づいてくれて、ずっと渡してくるグラス(もしくはは任。確かな時と心の流れが、映像化されて一首にピタッと収まっている。そして、つまりあなたが一番好き。

子供らに公園の水は伸ばされて真夏の空は口を開けたり

横濱市 友常 甘酢

【評】ふざけて放水しているのだろう。それを水を伸ばすとした表現が面白い。下の句の擬人化も、スケールが大きくてユニークだ。

さみだれの生駒の谷は真っ白なくちなし咲かせ白く暮れゆく

生駒市 宮田 修

【評】雨にけむるくちなしの白花たち。全体にS音とK音が響きあい、音の景色を作っている。結句の「白く」も印象的だ。

人の声カラス鳴くこゑ湿らせてけやき並木を通り雨過ぐ

市原市 井原 茂明

香水の香の香の香の香の香の中に確かに亡き人のコロン

オランダ 宮沢 洋子

どんずずずとどんとどんとと腹底をえぐるや子等の打つ陣太鼓

堺市 近藤 好広
泣きそうなたしを強く押し込んで逆方向から笑顔を絞る 東村山市 巢守たまご
七月の夏の始まるワクワクがずっと続いていけば恋です 東京都 仲原 佳
かき氷に微笑みながら子のかけるマグマのよう なべリーのソース 小諸市 藤 雪陽
椽の葉が梅雨の晴れ間に広がり空へと歩む靴底のこと 柏市 塩田 淳文

黒瀬 珂瀾選

九十二歳の身を一滴の香水で締めて猛暑の美術館訪ふ

【評】九十代にしてこのダンディーさ、見習いたいです。「締めて」という表現には、魚を酢で締めるようなユーモアがありますね。雨の午後ひとり臥せりて書を読めば吾子の枕に残る吾子の香

【評】一人で休みか体調不良か、子供の枕を借りて臥せている景。そこにかすかに我が子の匂いを感じる。親子ならではの身体感覚が、情緒豊かに描かれています。

顧みて至幸の日々と思へるやう夫の吸痰息つめてなす

神奈川県 鈴木 栄子

【評】これこそ熟年夫婦の愛の形。衰えゆく相手にずっと寄り添う心です。一方で「息つめて」に介護の難しさも表わされている。自身のお身体も大切になさってください。

咲き終えた紫陽花の殻を摘みゆけば奪衣婆みたいと言ふ女のあり

新発田市 本田 政嗣

わが死ねば無縁仏となるだろう墓を心ゆくまで洗う

山口県 末広 正巳

波高きこの耳鳴りの時に終活という流行りに乗るか

宇都宮市 津布久 勇

右翼手の拳ぐるグロブの先に敵傍山あ濃き緑して

大和郡山市 四方 護
大谷のノックアウトを嘆きをりなんと甘美な嘆きなるかな 京都市 五十嵐幸助
三歳児お店いっこの最初には「防犯カメラがあるよ」と言ふ 大網白里市 原田 友香
無理をせぬやうにと刑務官に言はる古稀すぎの身は無理せねばいかぬ 大分市 長畑 孝典

◇投稿規定◇ はがき1枚に未発表の1作品。住所、氏名(ふりがな)、電話番号を明記。◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。選者が添削することもあります。〒103-8601、日本橋郵便局留、読売歌(俳)壇、〇〇先生(希望選者名)係または読売新聞オンラインから ◇次回は21日(月)に掲載 右の影絵はしょうりょうま